

コロナ禍の影響で高校への出前講座も2年連続で中止になった。親元を離れるであろう高校生には、働くことの意義やワーク・ライフ・バランスの大切さを伝えたい。

高校生を前にすると時代の流れを感じる。昭和30(1955)年代、まだ一般の家庭には、テレビも冷蔵庫も洗濯機もなかった。灯油ファンヒーターもエアコンもない。冬、暖をとれるのは、囲炉裏(いろり)と火鉢(炭火)しかない。子どもの手はあかぎれ、しもやけになった。暖かくなると自然に治る。春、稲の古株に鍬を入れる田起こし作業は子どもの手伝い仕事だった。お使いで買い物に行くと、同級生が店番をしている時代だった。しかし、やがて昭和30年代の終わりには、鹿児島島の片田舎でも、土間(台所)から、水がめ、かまど、羽釜が消え、子どもの手伝い仕事も消えた。今、子どもの世界に働くという文化はない。

戦後、日本社会はがむしゃらに走って来た。時代の雰囲気伝えるのは難しいが、「あゝ上野駅」(1964年、集団就職列車を歌う)、「ヨイトマケの唄」(1965年)、「黒部の太陽」(1968年、黒部ダム建設の映画、当時の映画スター総出演)などで少し感じてもらえるだろう。その頃、高校生だと、ラジオの深夜番組で、深夜働いている人々からのリクエストによる曲に接した。ボブディラン全盛期である。

それから半世紀を経て、令和の時代、日本社会は豊かになったとっていいだろう。

でも、今、あまり幸せでないのかも知れない。「過労死白書(過労死等防止対策白書)」が発行され、各相談機関でも、職場のいじめやハラスメントの相談件数が激増している。また、期限付き雇用で、次回の契約更新があるかを心配している人々も少なくない。昔が幸せだったと言っているわけではもちろんない。白いごはんに卵かけがご馳走だった時代には戻れない。

学校卒業後3年以内の離職率が高校で50%、大学で30%と高いのも気になる。離職がすべてマイナスというわけではもちろんない。多くの企業は長期的視点で若者を育てようとしている。だから、3年は辛抱しろとよく云われる。どんなものであれ、若い時の経験は将来に生きる。しかし、今は、もう少し丁寧に将来の希望を語りかける必要がある時代ではないだろうか。また、若者使い捨ての会社もないわけではない。危険で劣悪な職場環境で、長時間の労働、ただ働きを強いる。激しいパワーハラスメントで逃げ出すことすらできない精神状態に追い込まれることもある。

今、18歳で成人になる。今、スマホの時代で誘惑と危険がいっぱい。50年前とは比較にならない危うさに立ち向かわねばならない。今、ITリテラシー(知識を活用できる能力)、消費・金融リテラシーが必須の社会である。生活が困難になった際に必要となる生活扶助の知識も欲しい。相談する力も必要である。日常生活や職場環境をめぐってなんだか少しおかしい、困ったと思ったら、1人ではかかえこまずに周りに相談する。国や自治体は、暮らしを支える上で大切な様々

な情報を提供しているし、各種の相談の場を用意している。弁護士会、社労士会など専門家の方々も相談の場を設けている。

就労の場面では、各県に労働局（総合労働相談コーナー）や労働委員会などがある。労働委員会は、公労使（公益委員、労働者委員、使用者委員）の三者からなっているから、相談の場でもそれぞれ異なる視点から意見をもらうこともできる。また、職場に労働組合があれば、そこでも相談できる。どこかに相談すれば、より適切に対応できる機関を教えてもらうこともできる。

相談すればすべて解決できるわけではもちろんない。しかし道が開けることもある。